

「ニコボツ」の精神

「ニコボツ」という言葉をご存知だろうか。この言葉を私は最近知った。耳にしたときは、「ニコニコ動画」のような軽い若者言葉かと思ったが、これが全然違う深い精神性を持つ言葉である。昭和の戦前戦中戦後に日本の経済界を牽引した人物が、敗戦後の不遇な時期に発した強いメッセージだ。

その人物とは、渋沢敬三(1896～1963)で、今年2023年は、彼の没後60年となる。敬三は、日本の近代的な資本主義経済の基盤を確立するために大きな功績を残した渋沢栄一(1840～1931)の嫡孫で、日本銀行総裁や幣原喜重郎内閣の大蔵大臣を歴任した財界人として有名である。栄一を取り上げた一昨年大河ドラマ(「青天を衝け」)にも、聡明な人物として登場していたのが記憶に新しい。他方、民俗学や民族学に造詣が深く、自ら研究を進める一方で、博物館建設に関与しつつ私財を投じて多くの研究者を支援した知識人としても著名な人物である。私は後者の人物像に触れることが多い。私が勤務する天理参考館(以下、当館と称す)は、大阪の国立民族学博物館(以下、みんぱくと称す)と対比されることも多い。現在の地に当館が新築移転する際にも、展示手法や膨大な資料の収蔵管理など、多くのことを参考にさせていただいた。そのみんぱくは、敬三のコレクションが元となっている。渋沢家の私邸の物置小屋に集め始めた民具資料は昭和12年には1万件を超えた。そこは屋根裏部屋に等しい場所だったため、自虐的な意味と親しみを込めて「アチックミュージアム(屋根裏部屋の博物館)」と称した。長年にわたって提唱していた国立の民族学博物館建設の機運が盛り上がらないことに業を煮やした彼は、私財を投じて博物館建設を計画する。東京郊外の保谷村に土地を取得し、建物を建て、研究員を配置するなどすべて自費でおこなったプライベートミュージアムだったが、後に公共のものとして広く一般に公開した。その後も国に博物館の設立を強く働きかけ続けるが、その努力は彼の没後十数年を経てようやく報いられることになった。それが今日のみんぱくである。

有名な逸話で、ドラマにも登場したシーンかと記憶するが、19歳の敬三はある日祖父栄一の訪問を受けた。当時男爵の地位にあった祖父が、孫に対するのに羽織袴姿の正装で端座し、平伏して嘆願した。「後継者になってくれ」と。父は廃嫡されていた。それは旧制第二高等学校農科を受験する前だったらしい。幼い頃から何かしらモノを集めてきては「博物館ごっこ」を楽しんでいた孫の研究者としての夢を、祖父は知らないはずはない。祖父の渾身の思いに孫は折れ、敬三は二高の英法科に進路を変え、在学中に社長に就任して後継者となる。二高卒業後にはさらに東京帝国大学法科経済科に入学して卒業した。

その後も財界で活躍するなかで、民俗学・民族学の研究活動

に惜しめない援助を続けた。戦前には「アチックミュージアム」を「日本常民文化研究所」と改称している。渋沢家にも警察が乗り込んできて“アチックという外国人をかくまっているとあらぬ嫌疑を何度もかけられて面倒”なので、思い出深い名前を変えたいらしい。恐ろしい時代である。そのアチックミュージアムが最初に取り組んだのが玩具研究という点も当館と類似点がある。当館の創設は、中山正善2代真柱が収集した人形などを含む中国の民俗資料の展示「支那風俗展覧会」の会期が終了した後に設けられた海外事情参考品室が始まりだからである。両者の着眼点が大変興味深い。

さて、戦争中に東条英機の強い依頼を受けて敬三は日本銀行副総裁に、後には総裁に就いた。そして敗戦後は、幣原喜重郎総理大臣に直接「大蔵大臣に」と切望され着任したのである。が、待ち受けていたのは公職追放という戦争遂行責任者としての処遇だった。このとき敬三から発せられたのが、最初に記した「ニコボツ」という言葉である。どうやらGHQが財閥解体の施策を打ち出したとき、「協力するなら渋沢財閥は解体しないでやる」とGHQから戦後処理の協力を求められたらしい。しかし、敬三は拒絶した。解体されてもよい、今までの財産を手放してもやむを得ないという決断を下したのである。一説には「ニコニコ笑って没落しよう」という意味らしい。犠牲の精神や悲壮感のない肩の力が抜けた言葉ではないか。しかし、その実体は重い。陽気に笑って苦しい局面を選ぶというのは、天理教の精神にも通じるのではないだろうか。これ以外に、「ニコニコ笑ってボツボツ行こう」という別の解釈も存在する。ともかく笑って辛い環境を受け入れるという点では共通するのだ。敬三はただ不遇な時代をニコニコ笑っていただけではなく、この時期に全国を巡って庶民生活の調査研究に余念がなかった。それら全てが博物館建設運動につながっている。現地における収集調査で得られた資料を保存する場所、そして誰にでもそれらを公開することで平等な研究機会を与えられる施設が博物館で、その重要性を彼が確信していたからに他ならない。

2025年に天理大学100周年、2026年に教祖140年祭、さらにその先の2030年に当館創設100周年を迎えるにあたり、誠に心に響く「ニコボツ」という言葉である。

[註]

- (1) 経済学者の成田悠輔氏が令和4年度パンタンデザイン研究所の卒業式祝辞のなかで述べた(2023.3.9 東京)。<https://www.youtube.com/watch?v=bbQX89IVkj4> (2023年4月9日アクセス)
- (2) 『渋沢敬三著作集』第4巻(平凡社1993)「旅譜と片影7ページ・ニコボツ時代」に編者の註として「ニコボツ＝ニコニコ笑ってボツボツ行こう」と追記されている。